
ウソとホント(仮)

篠 夕姫

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ウソとホント（仮）

【Nコード】

N3480T

【作者名】

條 夕姫

【あらすじ】

「魔王を倒してくれ」と15歳にして異世界に召喚されてしまった少女は、理不尽なその国に対して憎悪の感情を抱いていた・・・のも最初の方だけ。その国の王子に恋をして、見事恋仲になった少女は彼との穏やかな暮らしを獲得するために魔王との戦争に挑み、魔王を無事に封印することに成功した。幸せの絶頂にいるはずの彼女だったが、もう既に身体は限界で。「私が居なくなっても哀しまないで・・・」そう彼女が意識を閉ざしかけた瞬間、彼女の視界には彼と親友が口づけを交わすシーンが飛び込んできて・・・!?

主人公最強系です。王道を極めようと書き始めたので、「よくある設定」がうじゃうじゃ出てきます。そんでもってチートです。超チート。そんなでも良いよーって方のみ読んじやってください（笑）
基本、コメディw

プロローグ（前書き）

素敵なくらいの見切り発車です。

他の小説が行き詰ってしまった為にちょっとリハビリで書き始めました。

一応ちよいちよい復活し始めてるので他小説に関しましては、もうちよい待ってくださいorz

プロローグ

身体の中の魔力を凝縮させ、私は文字通り心血注いで封印魔法を完成させた。

目の前の魔王が悔しそうに苦悶の表情を作り上げ、呪詛の言葉を吐いてくるが、そんなものが無くても私の命は尽きる寸前だ。無意味以外の何物でもない。

後方から私の名前を呼ぶ誰かの声がするが、それに返事をする力も気力ももう私には無かった。

ああ、これでやっと終わるのか。

そう思ったら、魔王を道連れにして死ぬのも悪くは無い事のように思えた。

この世界に召喚されて早3年。15だった私ももう18になった。

「魔王を倒してくれ」などという勝手な理由で私を召喚した他力本願な異世界の国に抵抗していた最初の頃を思い出す。

なんでこんな国の為に！と心底思ったものだ。

・・・でも、私は恋をしたんだ。

全てを捨てても良いと思えるような恋を。

その人を守るために、彼を生かす為に私は一生懸命、戦った。

彼と恋人同士という甘い関係になってからは、彼と共に生きる為に、平和な世界を作る為に、戦った。

でも、平和な「日本」という国で15年間生きていた私だ。

「恋の為」という感情だけでは戦場はあまりにも辛すぎた。
戦って、命を奪って奪われて。疲弊していった私はやっこのことで
今日を迎えられたのだ。

「魔王の封印」

これを成せば、きっと幸せになれると思っていた。
やっとな穏やかに彼と生活できると。

・・・でも現実はそのなにごとにも甘くなくて。

強大な力を持つ魔王を封印する為に私は全力を注いで、もはや身体
は空っぽ状態だった。

あーあ、私、死んじやいそう

そんな虚脱感が身体を包む。

彼と共に過ごしたかった。

彼と共に生きたかった。

なのに、その願いは叶いそうもないのだ。残念すぎる。

泣かないで

哀しまないで

私が死んでも貴方は幸せになって・・・

そう思いながら力が抜けていくのに抵抗せずに瞼を閉じようとした
ところで私は見た。

見てしまった。

封印魔法の影響で出来たクレーターの淵で

私が恋した彼と

この異世界での唯一の親友と呼べるような存在の彼女が

寄り添い、口づけあっているのを。

ブログ（後書き）

読んでくださりありがとうございました。

誤字脱字などにお気づきになられた場合は、是非教えていただける
と嬉しいですww

連続投稿します。

おはようございます（前書き）

読んでいただけたら分かりますが、基本この小説はコメディで構成されております

おはようございまーす

「ふざけんなー！ー！ー！ー！！！」

大きな叫び声に覚醒を促され、私はガバリ！と飛び起きた。

ああ、なんて恥ずかしい。自分の寝言で目が覚めるなんて！

目が覚めると一番最初に飛び込んできたのは、薄暗い天井だった。鍾乳洞のような印象で氷柱のように水晶のような鉱石が沢山ぶら下がっている。

見覚えのない光景に、？と首をかしげつつグルリと辺りを見渡すと、自分が洞窟の中の浅い泉の中に横たわっていたことが分かった。

あれ？どうしてこんなとこに私いるの？？？

眉間にしわを寄せて考えて見るが答えは出ない。

記憶を辿るうにも、さっきの夢だか現実だか分からない腹立たしい映像が頭の中にちらついていてどうにも集中できそうにないのだ。

ああ、クソ。夢にしてもリアルすぎだ。

彼は誠実で優しくかつたし「君は大切な人だ」と言ってくれてたじゃないか。私が疑ってどうする！

私に愛をささやいてくれた堅実な彼に失礼だ。と映像を振り払うように頭を振って私は、年頃の女の子とは思えないような掛け声とともに立ち上がる。

つまりは、「どっこいしょ」な訳だけど。

立ち上がると、ポタポタと服から雫が垂れ落ちる。

日本に居たころは黒かった、今は真っ白な髪も泉の水によって濡れそぼっていてまさに今の姿はぬれ鼠という言葉が相応しい。

肌に張り付く服が不快で乾かしたくはあったけど、魔力の全く感じられない洞窟内ではそれは出来そうにもない。深く溜息をつきつつ、私はゆつくりとした足取りで洞窟の中を歩き始めた。

足元はツルツルの水晶でペタペタと反響する足音はどこまでも響いていて、いまいる洞窟がせまくは無い事を教えてくれる。

しばらく無言で洞窟内を徘徊し、わかれ道など無い道をどこまでも歩いていると遠くに光が差し込んできている場所を見つけた。

どうやら出口らしい。

ホツとしつつ、少し早足になりながら出口から抜け出る。

薄暗い洞窟内に目が慣れていたおかげで、外に出ると目がチカチカする。

臉を下ろしてしばらく光になれるのを待ち、それに慣れたころ私はゆつくりと臉を持ち上げ

「・・・・・・は??」

硬直した。

洞窟の出口は切り立った崖のちょうど中ほどにあっただけらしい。

狭い足場から軽く身を乗り出せば目が眩むような高さだった。

地面は物凄く遠い。孤立無援。というか、ホントに何処だここは。

啞然としつつとりあえずは濡れた服と髪を乾かそうと視線を巡らせて、空中に漂う魔力^{マナ}を使用しようとする。突然ふわりと風が吹いた。優しく包み込むような風は一瞬で私から水気を飛ばし、くるりと空中に形を作る。

『姫様、おかえりなさい!』
『姫様、おはよう!』

口々にそう語りかけてくるのは水色の小鳥を象った風の精霊達。
嬉しそうに歓喜の声を上げるそれらに私は苦笑しつつ「おはよう」
と返しつつも内心では驚きを禁じえなかった。

異世界トリップの王道というか、私は素晴らしくチートなのだ。
神や精霊、動物たちに愛される体質で、日本に居た時と比べると見
目も随分と美しくなっている。

自分で言うものなんだけど、あれだ。絶世の美女ってやつ??

雪のように白い髪は微かに銀色を帯びていて艶やかで、瞳は海のよ
うな蒼穹色。

手入れなんて必要ない程に澄んだ肌は日焼けなど知らないというよ
うな真っ白さで、ともすれば不健康そうに見えると言うのに、そん
な危うさなど感じさせない清潔さを持っている。

最初、自分の姿を見たときは受け入れられなかったが数週間もすれ
ば慣れた。もう鏡を見ても驚かないし、お風呂の時も普通に洗える。
・・・うん、最初は直視できなかったんだよ。自分の身体なもの
ね。

まあ、そんなことは置いといて。

そんな異世界トリップの王道中の王道な目にあつた私には、チート
能力がこれほどか!という程に詰め込まれていた。

で一つ目が、精霊魔法が対価なしでほぼ無限に使える・・・という
こと。

精霊に愛され体質な私は、普通の人たちが使うような長つたらしい
お伺いの呪文なんてものが無くても精霊魔法が使える。

・・・というよりも、精霊達が勝手に私の意を汲んでイロイロとや

つてくれちゃうのだ。

寒いな〜と思えば火の精霊達が温めてくれるし、暗いな〜と思えば光の精霊が明かりを灯してくれる。

果ては、コイツ気に食わない！と思えば闇の精霊がソイツを闇の中に引きずり込んでくれたり・・・とかね？

勿論、そんなことは望んでいないと懇切丁寧に闇の精霊に説明して吐き出して貰いましたけれども。

そんなこんなもあつたりしたので精霊達に愛され体質な私にとって、風の精霊達が現れた事はそんなに驚くような事ではなかった。というよりもコレは日常の出来事だ。

精霊と私。それは常に一緒に居るものなのだから、驚くことなんてない。

なかった・・・のだが、問題はそこでは無い。

現れた風の精霊達の数が尋常ではなかったのだ。
空中に無数という水色の小鳥が飛んでいるんだ。流石に驚くよ、こりゃ。

いつもなら私の願望を聞いて（勝手に）願いを叶えようとして現れるのは2〜3匹（匹？）だけ。

精霊達の話によると、あんまり大勢で来ると姫様（精霊達は私を姫と呼ぶ）に迷惑がかかるので順番を決めてそれで来てるんだとか。だから、こんなにも大量の風の精霊を見るのは初めての事だった。視界を埋め尽くすように鳥、鳥、鳥、鳥。

サイズはみんなバラバラで、水色と一言で言いはしてもその色は様々だ。

ああ、綺麗な鳥たちを表現する語彙の少ない私の残念な頭が恨めし

くしょうがない。

一際身体の大きな鳥が群れの中から目の前に進み出てくるのをぼんやりと見ながら私はそんなことを頭の中で考えていた。

現実逃避だ。分かってる。だけど、私には全くもって今の状況が分かかってないのだから、これくらいさせてくれても良いと思う。

イメージ的には水色のフェニックスと言ったところか。
彼は私の元までくると、くるくると喉を鳴らしながら

『ようやくお目覚めなのですね。』

そう、言った。

優しい声は記憶にあるものと全く変わらずにあって、私は安堵から思わず肩の力を抜く。

「えーっと、……おはよう?」

なんと言えば良いのかが分からなくて思わず間拔けな返答が口をついて出た。

というか、ねえ、私寝てたの?

つらつらとそんなことを考えていたら、風の精霊神であるブラストは呆れたように器用に肩を竦めて私の頭の上に着地（着頭?）する。精霊だからなのか重さは0。肩は凝らないと思う。

『何も覚えていないのですね』

覗き込んで来るブラストにコクリと頷いた私の頭の中にはずっと、何がどうしてこんなところにといった疑問がグルグルと渦巻いている。

『魔王を封印した直後、姫と魔王は姿を消したのですよ。全く覚えていないのですか？あの戦場に封印魔法の影響で出来たクレーターだけを残して姫は忽然と消えたのです。我ら精霊は姫が生きている事を信じて探し続け、やっとの事でこの洞窟で眠る姫を見つけずくと守護をしつづけていたのですよ。』

ああー・・・、魔王との戦闘は夢じゃなく本当にあったのか。

・・・うん??

つてことは??

『ああ、ちなみに姫が行方不明になった数日後にクリスはローズと結婚しましたよ。子供が3人出来て順風満帆な日々を過ごしてましたね、確か。まあ姫の事を散々利用した上に幸せになろうとしていたのに腹を立てたフレイルが国ごと滅ぼしましたから、今はもうその子孫も残っていませんが。』

・・・夢じゃなかった・・・とな?

・・・・・・イッタイドウイウコト???

なんでクリスはローズと結婚したの?しかも私がいなくなった数日後って・・・なに?

つまりは、あの夢は夢じゃなかったってこと?

いつからローズと恋仲になったたの？
いつからローズは私を裏切ってたの？

アノコトバト、アノエガオハ・・・ウソ？？

サアツ・・・と血の気が引いていくようだった。

あまりの衝撃にもう、頭が真っ白だ。

問い詰めたくても、火の精霊神であるフレイムが先に滅ぼしてしまつたらしい。

いや、まあ、話聞いたら私もぶちギレてそれくらいはやりそうだけど、余計なおせっかいではある。私にぶん殴らせろ、と言いたい。

『更にちなみに。フレイムを擁護する訳ではありませんが、滅ぼさなくとも姫は500年という人には長い時を眠り続けていたので例えフレイムが滅ぼさなくとも少なくともあの2人が生きて再び姫と会う事は無かつたでしょうね。フレイムとダークは事の詳細を知っているらしいので詳しい話は2人に聞けばいいでしょう』

・・・・・・前言撤回。フレイム、よくやった。

詳しい話は今度聞くにしても、なんか私の勘が告げているのだ。胸糞悪い話ダゾ とね。

ならばお礼こそ言えても恨み事などフレイムには言えまい。そう思うくらいには私、お腹の中黒いからね。

というか私500年も寝てたのかー。実年齢518歳？お婆ちゃんにも程があるだろう。

「まあ、クリスの事は後でいいや。腹立つから今は考えたくないし。・・・とりあえず、ここ何所か分かる？」

『ここはアウエイズの森の一角です。』

人間誰しも切り替えが大事だよね。混乱のしすぎでショートしたとも言っけど。

ブラストの言葉になるほど、崖の下に見えたあの森はアウエイズの森だったのかと納得。

アウエイズの森とは、私が召喚されたベリオ王国からだいぶ離れた場所だ。

一度だけ。たった一度だけ魔王討伐の旅の途中で立ち寄った事のあ
る森で、神と精霊の住まう神聖な森。

あの時は、神に愛され（以下略）のお陰で大変な目にあつたのだが
まあそんなことは今は問題ではない。

それにしても、アウエイズの森は確か戦場から大分離れた場所にあ
つたはずだ。

私の記憶が正しければベリオ王国を挟んだ正反対にある場所なハズ。

あ、何で魔王討伐の旅の途中でそんな場所に行ったのかは今は割愛
させていただくわね。いつか語る事もあると思うし。

とにかく語る事もあると思うし。

とにもかくにも。何で私はこんなトコに？
ブラストは私のその質問には『すぐに分かりますよ』と言うだけで
教えてはくれなかった。

このいじわるめ。

『ひとまずは、下に降りましょうか。皆も一先ず下がちなさい。そ
ろそろ姫に会えない鬱憤で爆発しそうな他の精霊神がいることです

しね』

ブラストはそういうとバサリと翼を羽ばたかせて風を起こし、私の身体をふわりと浮かばせた。

風の精霊達は多少不満そうにしながらも口々に『姫様、またね』『何かあつたら呼んで』『なにも無くても呼んで』と囁いて風にその姿を溶かしていく。

おい、最後の言ったの誰だ。何の用もないのに呼ぶってどんな状況か10文字で私に説明しなさい。

「うん、みんなまたねー」

精霊達の姦しい声にはいばいと手を振った私は、皆が風に溶けたのを確認するとブラストの精霊魔法で起こされた風に乗って数十メートルという高さのある足場から飛び降りた。

危なげなく着地して思わず体操選手のようにポーズを決めてから、ハッ・・・と気付けば案の定ブラストが変なものを見るような目を私に向けていた。

は・・・恥ずかしいっ！

日本にいた頃はこれをやるとノリの良い友達が「わー」と心の伴わない歓声と拍手をくれたものだが、こちらではポーズの意味が通じないので頭の中を心配されてしまうのだ。

私は正常だ！！と訴えるがそれすらも哀れむような目で見つめられ、いたたまれなさに私はぐっ・・・と唸る。

「いつ・・・今のはねっ、私のいた世界では意味のあるポーズで『そんなのはどうでもいいですから他の精霊神を呼んでください。暴走寸前ですので』」

言い訳のようにポーズについて説明をしようとしたらバツサリと切られました。

ええ、それはもうバツサリと。

頼むよ、弁解くらいさせてくれと言いたいところだが暴走寸前という聞き捨てならない言葉に私はその心の声を無理矢理飲み込んだ。

頭の中が残念な子だと勘違いされるのと、この世界の崩壊阻止だったら優先すべくは勿論……

勿論……世界の崩壊の阻……って、あれ？よく考えてみたら私、別にこの世界壊されても困らなくね？むしろ清々するかも？

超ブラックな思考が頭の中を一瞬過ぎったが、微かに残る良心で心惹かれるその案を宇宙の彼方に放り投げておく。

やろうと思えばいつでもやれるのだ。本気でぶちギレた時の為にその手段は取っておこうと思う。

「ダーク、レイ、シー、フレイム、ライト、グラン。みんな来てー」

なんとも間の抜けた召喚方法もあったものだと言、笑ったのは一体誰だったか。

精霊に愛され（以下略）な私にとって召喚魔法なんてあってないようなものだと言、確かその時は反論した気がする。だって皆勝手に来るんだから。

でも精霊神達は例外で、彼らは昔私とした約束に従って勝手に出てくるということを絶対にしない。

それは『呼ばれないと出て来ない』という一方的な約束。

彼らは一様に過保護で、常に7人（さつきブラストが入って言ったので匹から変更。なんか今更な気もするけど）の精霊神が共にあるうとするのに呆れた私が無理矢理結ばせた約束だった。それを律儀に守っているのだ。ただの口約束なのにみんな、真面目ねーと思っってしまったのは内緒だ。

精霊ってこういうところがやっぱり良いと思う。

みんな思いやりがあって優しいし、人間とは違って誠実だ。まあ、私限定で、だけど。

私の呼びかけに空気がぐらりと揺らぎ、一瞬で目の前に6ひ……
・失礼、6人の精霊が現れた。

おはようございまーす（後書き）

長くなりそうだったので切りました。

続きは早ければ明日・・・かなあ？？

矛盾点が見つかった為、軽く訂正しました。（5月25日）

・・・お久しぶりです？（前書き）

お気に入り登録されている数と閲覧数が小説のページ数と比べると
凄い事になってて（´・・・・o）ナゼニ？とか思ってたら

まさかの日間ランキングの17位とか19位とかの位置にいたとい
うwww

だれかこの状況を詳しく私に説明してくれww

主人公的には、眠りにつく前のことは昨日のコト
なのに周りにとっては500年ぶりの再会ww

・・・お久しぶりです？

さて、一人ずつの特徴を説明するわね。

ダーク 闇の精霊神

見た目はグリフォンに似てる感じ。

まあ、全身これでもかってくくらい真っ黒なんだけど。

レイ 光の精霊神

見た目はもろペガサス。羽生えた白馬だよ、白馬。

真っ白で、額には透明な円錐形の角がある。

シー 水の精霊神

見た目は青い大蛇。

海みたいな蒼色で、背中には背びれみたいなのがあって、水陸どちらでも生活可能・・・らしい

フレイム 火の精霊神

見た目は深紅の虎って感じ。

乱暴で喋り方はヤンキーっぽいけど、凄いが利く子。

ライト 雷の精霊神

見た目は大きな狐っぽい感じ。ふわふわな尻尾がお気に入りデス
でも中身は子供。ガキンチョ

グラン 大地の精霊神

見た目は熊。おっきな熊。大きな肉球は愛すべきものです。

ちなみに、言うとしー以外はみーんな男。

まあ、精霊に性別なんてあつて無い様なものだから性格とか声質とかに限った話・・・なんだけど。

ちなみに人型にもなれるんだけど、私が動物好きだからか皆意識して動物の姿をしている事が多い。

一回、「なんであんまり人型にならないの？」と試しに聞いてみたら『そっちの方が姫が抱きついてきてくれるから』と言われて二の句が継げなくなった。

いや、体格の良い見た目イケメン成人男性に（女性体のしーと子供のライトにはよく抱きついてたんだけど）可憐な乙女がおいそれと抱きつく訳にはいかないでしょう？と心の中で反論してしまった私は絶対に間違つてはいないはず。

まあそんな理由で、動物姿になるよう心がけ始めたしーとライト以外に私が心奪われ、抱きつかれなくなったしーとライトがそれに嫉妬してつられるように・・・と今のような状況に至っている。

私に言わせれば実にくだらないのだが、精霊神達にとってはとても大事なことらしい。

・・・閑話休題。ちよつと長くなったけど。

目の前にズラリと並んだメンツに私は呑気に「やつほー」と手を上げた。

私からすればちよつと前まで一緒に戦場で戦っていた感覚なんだけど、皆からすれば会うのは500年ぶり。

精霊の生の長さから考えればたった500年・・・のはずなんだけど、なんだろう。皆目が怖いよ・・・。

『・・・姫、やっと目が覚めたのか』

『心配したよ、体調は大丈夫？』

『ひーちゃん、心配したわよー!!』

『たつく、寝すぎだっつーの』

『起きんのおっせーよ!こんの、寝ばすけめ!!』

『心配したぞ、姫。もう大丈夫なのか!?!』

順にダーク、レイ、シー、フレイム、ライト、グランだ。ブラストは沈黙を貫いている。

よしよしと大きな手（前足？）で頭を撫でてくるダークに、「え、あれ、皆結構マジで涙目？」と私はうるたえる。

ツンデレ性質のあるライトですら涙目なのだ。随分と心配をかけてしまったようだと言え500年も眠っていた自分を反省する。

・・・するよ。うん。反省するする。

だから、6人全員で説教するのはやめてちょうだい!!!

再会を喜ぶ言葉から一転、いつのまにか『あんな国の為に・・・』とか『あんな男の為に・・・』とか『あんな危険な魔法使うなんて

無茶を・・・』とか寄つてたかつて説教をし始めたのだ。

ぐちぐち言われる責め句に流石に罪悪感も薄れてくるってもんだ。
五月蠅い、黙れ。とまでは言わないけどさ。ちよっと、しつこくない???

「心配・・・かけてごめんね?。」

あまりの口五月蠅さにうんざりしてきた私は意識して可愛らしく小首を傾げて儚く微笑んだ。全員がグッ・・・と詰まりこむ。

秘儀、儚い美少女スマイル!!

・・・ネーミングセンスが無い事についてはスルーでよろしく。
うん。

7人全員、みんなして基本的に私には甘甘なのだ。ちよろいちよるい。

言葉を無理矢理呑み込んだ風な精霊神達に私は、殊更分かりやすくシユンツ・・・と頂垂れてみせる。

ふふつ、私は女優なのよ!演技なんてちよる・・・ちよる・・・

・・・あれ??

・・・えーつと??

みんないつの間に人型になったの・・・カナ?????

「姫、泣くな」

「ごめんね、言いすぎた」

「ひーちゃん、ひーちゃん!!泣かないでえ」

「おわつ、姫、ごめん!」

「なっ・・・何泣いてんだよ!!」

「ごめんよ、姫。頼むから泣かないでくれ」

「あーあ、泣いてしまったじゃないですか。勢いよく迫りすぎですよ」

いや・・・泣いてないし。

今まで沈黙を守っていたブラストまでが、無責任にもそんな事を言
つて煽るから更に慌てる面々。いや、ていうか何故にブラストまで
もが人型にww

なんかものすごく顔を上げづらい状況になってしまった。

壊れ物を扱うかのような優しい力で私を抱きしめてくるダークの胸
に額をグリグリと圧しつけて、私は顔を隠す。

説教から逃れることには成功したが、次に来たのは慰めの嵐。

すんません、演技でした。とは言いだせない皆の心配そうな声に罪
悪感がグサグサッと胸に突き刺さってくる。

そうでした、みんなこんな子でした。と最近（私にとっては）の殺
伐とした空気の中で忘れていた事を思い出す。

思わず遠い目をしてしまったのは誰にも責められないだろう。

ダークの胸の中で慰めの嵐とグサグサ突き刺さる罪悪感に耐え抜い
た私は今、アウエイズの森を歩いている。

7人の精霊神を引きつれて歩くのは本意ではなかったけど、誰か1

人を残して他の全員を精霊界に戻そうとすると森が滅びそうだったので諦めた。

本気でお互いに殺意を飛ばしてるもんだから、流石の私も空気を読む。

目的地は、アウェイズの森の最奥部。

レディーシアという女神が宿る大樹のある場所だ。

私が眠っていた洞窟のあった崖もなかなか森の奥深い場所にあつたらしく、歩くのは苦ではない。

裸足なのでたまに小石を踏むと軽く痛みがあつたが、魔法で保護してあるので怪我をすることもない。

『姫、歩かずとも私たちの背中に乗ればすぐに着くんだぞ？』

『そうだぞ。遠慮する必要は無い』

『その短い脚でよろちよろ歩いてたら次の日になっちまうぜ』

等と五月蠅い外野がいるが、こいつらの背中に乗るとちょっと厄介な事になりそうだったので丁重に遠慮させて頂いた。

理由はいろいろとあるけど、ここでは割愛。これも今度詳しく話す機会があるでしょう。

小さく歌を口ずさみながら（勿論選曲はト　口だ）、私は森の中を歩き進める。

目印なんて無い木ばかりの場所だが、迷うことは決してない。なんでって、そりゃあ

『こつちよー！姫ちゃん、こつちこつちー！！！！！！』

という盛大な呼び声が森の奥から響いているからだ。

ああ、なんて神聖さとかを丸ごと無視したような声だろうか。

これが人々に「慈愛と美の神」と呼ばれる神かと思うと頭痛のする

思いだ。

「レディ、五月蠅い・・・」

米神に指を当てて深い溜息をつきながらも声を頼りに歩いていると、唐突に視界が開け、目の前には空に届いているんじゃないかと疑ってしまふくらいに大きな樹が鎮座している広場に到着した。

「キヤーツ！！相変わらず可愛いわね、姫ちゃん！！心配したのよお؟؟？」

駆け寄ってくるのは、緑色の髪美人。

彼女こそが先ほどの大声の主で、「慈愛と美の神」などと私からすれば「分不相応すぎるだろう」と言う印象な二つ名を持つ女神様だ。ここに来る途中で軽く精霊神7人衆に聞いたところ、魔王封印後に魔力となつて空气中に溶けて消滅しそうになった私をレディが^{マナ}かき集めてくれたんだとか。

でレディは、私を一人占めできるようにと心配性な精霊神達に私が無事な事を秘密にしたまま、私が眠れるようにと静かな洞窟に寝かせて500年守り続けてくれたらしい。

いや、突っ込みどころがいろいろとありすぎてアレなんですけど。しかもそれを意地で見つけ出した精霊達も凄いと思う。割かし本気でレディは私を隠そうとしたらしいし。

「レディ、助けてくれたんだってね。ありがとう」

「姫ちゃんがなくなるなんて嫌だったんだもの！ジェイルとキルアも手伝ってくれたのよ！」

ジェイルは生命を司る神で、キルアは運命を司る神。最高神と呼ば

れるそうそうたるメンバーに心底呆れてしまう。

なんていうか、ホント規格外だな、自分。と思わずにはいられないのだ。

それもこれも神に愛（以下略）・・・・いい加減略すのも面倒になつてきたな・・・・。

・・・お久しぶりです？（後書き）

読んでくださりありがとうございます

それでもって更新遅れてすいませんでしたorz

次の話は早めにつp出来るように頑張りますww

誤字脱字、文章の矛盾点などに気付かれた場合は是非ご指摘くださいませ

ちなみに未だに主人公の名前が出て来て無いのはただ単に名前が決まっ
てないかry・・・げふんげふん

そして早速手直し

内容的にはあんまり変わってません

13：36手直し完了

女神様って意外とこんなもんです。(前書き)

超短いです・・・

上手く区切れない私のMissorz

次話を今日中に更新出来るように頑張りますのでご容赦ください……

女神様って意外とこんなもんです。

大樹の太い根っこに腰かけてレディの話を聞いていた私は、ふむ。と顎に手を当てた。

レディ曰く、500年経って随分と人の世は変わったんだとか。

まず大きく変わったところは、人が精霊魔法を使えなくなった所にある。

これについては聞いた瞬間に「やっぱりか」という感情しか生まれなかった。

私LOVEな精霊達が、私を散々利用した人間に力を貸す訳が無いのだから。

で、精霊達と同様に神と聖獣達も人間に力を貸すような事をほぼしなくなったんだとか。

これも精霊達と同様の理由なんだってさ。

義務的事はやるが、過剰な恵みを与えなくなったらしい。

本当は何もしてやりたくないんだけどというのが本音。でも創造神ゼロフトがそれはさすがに・・・と渋ったらしい。

不満そうにそう語るレディに「そうかいそうかい」と適当に空返事を返しつつ私は唸る。

ということとは、だ。

前々からチートだったというのに、今は更にチートな訳だよね？私って。

神様と精霊と聖獣全部が味方で人間が使えなくなった精霊魔法も使用可で、魔力許容量が無^{マナ}限大。つまりは魔法も精霊魔法もいろいろと使い放題。

・・・え、もうこれって人間って言えくない？？

試しに火よ灯れーと心の中で念じてみたらポツと人差し指の先に小さな火が灯った。

見れば、嬉しそうに私の指先に火を灯しているのはどこから現れた名も無い小さな火の精霊。

フレイムは自らの眷族を羨ましそうに見ている。

・・・おい、何自分の眷族に嫉妬してやがる。

精霊に「ありがとう」と微笑んでお礼をいつてから私は、更にふむと唸る。

精霊魔法は使える。まあ、ブラスト達が今一緒に居る時点で使えない訳が無いのだけれど一応の確認もおっけー。

他に変わったところは？と尋ねた私にレディは『いっぱいあるわよー。上げ出したらキリが無いくらいには』とあっけらかんと笑って見せる。

この世界と人間に興味は無いけれど、生きていくためにはこの森の奥深くにずっと引っ込んでいる訳にもいかないだろう。

なにしろ私は科学技術の進んだ先進国、日本に生まれた現代っ子なのだ。

森の中で原始的な生活・・・なんて御免こうむりたい。

精霊達がいれば森の中でも楽で最上級の生活は出来るだろうけどヒモ生活なんてのもまっぴらごめんだ。

私は私の力で稼いで精いっぱい贅沢したいのだ。

悩んでいる時間は数秒だった。

うん、森、出ようか

なんて簡単に結論を出した私は必死に引きとめようと暑苦しく懇願するレディを文字通り足蹴にして（レディはドMなので滅茶苦茶喜んでいた。キモイ）、召喚魔法を発動させる。

これまた何の問題もなく発動した魔法によって喚び出されたのは、リオルと私が名付けた強大な力を誇る始祖ドラゴンという種族の生き物だ。

真珠のように七色に輝く純白な色の鱗の西洋風ドラゴンのリオルは、私専用のアッシー君第一号。

始祖ドラゴンは気高く誇り高いので普通は人を背中に乗せたりしないのだが、言わずもがな私は例外中の例外。

ちなみに精霊神達の背中に乗らないのもこのリオル君が理由だったりする。

私専用のアッシー君達は、自分達以外に私が乗るのを決して良しとはしない。

寧ろ、全面戦争を勃発しようとするくらいには嫉妬心をむき出しにするのだ。

一回、ダークの背中に乗せてもらった時はリオルと陸上用アッシー君こと銀狼のルガが激怒して森一つが吹っ飛んだことがあった。

なまじお互いが強大な力を持っていてプライドも天に届く程に高いもんだからどちらかが滅ぶまではやめない・・・と灼熱してて、私が「やめないと二度と口利かない」というアレな発言を言い渡したことによってやっとお開きとなった。

あの時は弟妹の喧嘩を仲裁してやってる気分だったわ。

生きた歳月からすれば大分私よりも年上なハズなんだけど、なんでもかな？年上の威厳とか感じた事一切ないわ、私。

クルル……

頭を下げて私にすりすりとしり寄り寄ってくるリオルの頭をヨシヨシと撫でてやってから私は、私の足元でハアハアいつていたレディを渾身の力で蹴り飛ばした。

森の中の木をなぎ倒しながら吹っ飛んでいくレディを尻目に、戻ってくる前にとつとと移動してしまえとリオルの背中に飛び乗る。

飛べない精霊神組も同じようにグランの背中に飛び乗り、飛べる組シー・フレイム・ライト・グランとリオルはバサリとそれぞれ翼を広げる。ブラスト・ダーク・レイ

爽やかな風が吹く中、静かな旅立ちに私は唇をキュッと噛みしめた。

今度は、人間なんか心奪われたりしない。

私は私の為だけに生きてやるんだから。

そう密かに心に決めて、飛び立つ合図としてリオルの背中をポンポンポンと三回叩いた。

『まってえええええ！私も一緒にいいいいいい！！！』

早々に復活したらしいレディの声が響いたがをそれを軽やかにスル
ーして、私たちは旅に出た。

女神様って意外とこんなもんです。(後書き)

.....短くてすみませんorz

それでもって、急ぎでのうpなので、多分手直し入ります(・・x・
)

逃げるが勝ちってホントかな（前書き）

まず最初に言わせてください
ごめんなさい！
と

次話投稿が今日ってどういうこと??と自分でも思わなくもないんですが・・・・
これ以上言ってもただの言い訳ですね。ホント更新遅れて申し訳ないです・・・・

逃げるが勝ちってホントかな

「リオル、お疲れ様ー。ありがとねー」

キュウン

アウェイズの森近くの村まで飛んでくれたリオルを還して（どこに還るのかを私は知らない。）、私はいま仁王立ちで立っている。

目の前にはボロボロになった7人の精霊神達。

ここに来るまで、いろいろとあったのだ。

そう、いろいろと……あ、思わず涙が。

今までの苦労を思い出すと心が荒む。

なんで森から街まで移動する短い時間の中でこんなに苦労をしなきゃいけないのか。

ほんと、私が一体何をしたって言うんだ。

「ほんと、良い迷惑。新しく約束作ろうか??？」

そう脅す私に怯える面々。

私の目の前にシュンツと俯く7人の更に向こう側に見えるモノに私は更にピキッ……と額に怒りマークを浮かばせる。

そこには、村がある。人間が住む名も無い小さな村だ。

私の知る世界は今より500年前だから、この村の事など勿論私は知らない。訪れた事も無い。

だからこの村の人も私の事など知らないだろう。知る訳が無い。

な の に

何故か村のど真ん中に彫像があるのだ。

精巧な、人の手では到底造れないような私そっくりな淡い水色の彫像が。

なんだこれは。と硬直する私を置いて、盛り上がる面々。
曰く

『この村を担当したのは私なの！姫そっくりで綺麗でしょ！？』

『いや、俺が作ったあの国の彫像の方が姫に似て可憐で美しい！』

『そんなことない、俺が作ったあの彫像が一番姫の清廉さを表せている』

云々。

愕然とする私を置いて果ては『誰が作った彫像が一番か』等と論争し始める始末なのだ。

・・・おい、ちょっと待て。これは何の嫌がらせだ。
と突っ込む隙すらない。というか、突っ込む気力すらない。

この場では唯一の味方であるリオルが「真っ白」というリアル彫像と化していた私を突つつく事で正気に戻してくれたが。
で、ぶちギレた私が魔法を発動し、冒頭に戻る訳だ。

この彫像を私が発見する前にも移動中、イライラボルテージが上が

る要素が色々あった為にもうホント大爆発って感じで上級魔法が炸裂して。

魔法は精霊神をボロボロにしてくれたんだけど、それでも私の腹の虫はおさまらない。

ふざけるのも大概にしろ。

何が楽しくてこんな羞恥プレイに耐えなければならないのか。

しかも、何？あらゆる村や国という場所にこれがあるって???？

死んでくれ

死刑だ。精霊に死は無い？

ふふっ、そんなん知らん。私が引導を渡してやんよ???？

殺気満載で微笑む私にビビる精霊神。・・・シユールだ。

「クソ馬鹿共めが。いい???あの像、それぞれが責任を持って破壊してきなさい」

「そんな!!!!全部良い出来なのよ!？」

「姫、そんなこと言うなって。全部姫にそっくりで快心の出来な」

「じゃかわいい!!!!グダグダ言わずにとっとと行け!!!!」

悲痛な声を上げるシーとフレイムが抗議の声を上げてくるが、そんなのは知った事ではない。

むしろ、快心の出来なのが問題だと私の心の中は暴風が吹き荒れる。なおも彫像の良さについて言い募ろうとするやつらに風の魔法を發動してそれぞれを吹っ飛ばすと全員が逃げるようにして去って行った。

「ごめんなさい！」と風の中に謝罪の声が聞こえた気がしたがそんなもんは価値が無い。

行動で示せ、行動で。

この阿呆共め。

フンツ。と鼻で荒く息を吐いた私は、ふと視線を感じて振りかえった。

そこには5人くらいの冒険者らしき人々。

やっべ

みられてた

精霊達曰く、今の時代の人たちは精霊が見えない・・・らしい。

恩恵に見放された人間達は、精霊や神々を信仰をする者は少なくなり、よって見る力を持つ者もほばいない。

精霊魔法が使えなくなり、後は退化するだけ・・・という現状に慌てている人類にとって今は魔法だけが頼りの綱云々と確かレディも言っていた。

まあ、つまりは何が言いたいかと言うと。

問題はこの人たちにとって今の私と精霊神達の会話がどう見えるかという事なのだ。

私は精霊達に向かってどなり声を上げ、痼癢を起して魔法を発動させてた。

・・・でも精霊達が見えない彼らにとつてはどう見える？

何もいない空間に向かって、怒鳴りつけて、・・・少なくとも、普通の人間が打てないような上級魔法を何も無い空間に発動させてる頭が沸いてる女????

・・・わーお。文字にしたらかなりイタくない??

私だったら無視する。なんか変な人がいるなー程度で、レッツスルーだ。

だってなんか巻き込まれちゃいそうだし。

その痛い人って思われるのが私つてのが問題だけど、まあ、そこら辺は置いとく。

今更人間になんと思われようと痛くも痒くもないし良いよ。うん。いい。

でも私の精神的な健康上にはよろしくない。

ああ・・・さつさと去ってくれ。なんと思われていようといいいから、早め早めに私の視界から消えてくれ。

大丈夫よ、今度からはこれを教訓に気をつければいいんだから。

むしろ、街中やら国のど真ん中でやらかさなかつた辺りまだマシよ。うん、マシ。マシだと思え、私！

あまりの羞恥に顔を両手で覆って、私という怪しい人物から彼らが遠ざかってくれる事を切々と願っている

「信じられない・・・!!」

という誰かの声が聞こえた。

そんなに私が珍しいか。誰もいない空間に向かって上級魔法を炸裂させていた私という変人が。

存在までも信じられない程に？いや、別にイイケドサ。

「お気になさらず素通りでどうぞー・・・」

小さく呟いてみるが、聞こえてるかどうかは甚だ疑問だ。

あーあ、穴でも掘ってしまおうか。んで、しばらくそこで暮らすのもいいかもしれん。

今度は500年と言わず1000年くらいさ、寝ようか自分。

この羞恥が薄れる頃に出てくれば言いんだs

「今の時代に精霊と会話できる人がいるだなんて・・・！！！」

つて・・・・・・ハイ???

あんだつてえ????

頼むもう一回言ってくれ。

私のぐちゃぐちゃ思考の隙間に這いこんで来た声はなんとも澄んできました。まる

おおう、イケメンボイスーなどと場違いにも考えてしまったのは立派な現実逃避だ。

なんだってこんな面倒なことに・・・と冷静な自分が頭の隅っこで呟いていたが、そんなのは今更だ。

この世界に召喚された時点で面倒事など起こりっぱなしなのだから。

予想外の発言に、あれ？この人この世界にいる数少ない「見える人」

の内の一人なの？？と馬鹿みたいに戸惑う私。

見えない事で誤解される事により感じる羞恥心と、見える事によって訪れるかもしれない厄介事。

どっちが私にとっては面倒なんだろうか。

・・・後者だな。間違いなく後者だ。

誤魔化せ、誤魔化すんだ私。

頭がおかしい子を装うんだ！

もう一回なにも無い空間に魔法をぶっ放して「おのれ、魔王め！私が成敗してくれる！」とか何とか言えば、きっと相手も遠ざかってくれる！！

「すみません、是非お話を・・・」

「だが断る！！！」

即座の否定後、ハツとして口を覆っても時はすでに遅い。

誤魔化す事も忘れて相手の発言に素直に反応してしまうとは何事か。しかもノリで。

後悔先に立たずとはまさにこの事。

「ルガ！！！！！」

猫の手も借りたいこの状況に迷わずアッシー君第二号を召喚した私は、召喚陣を伴って現れた巨大な狼の背中に即座に飛び乗る。誤魔化すともうどうでもいい。逃げる私。世界の果てまで。

「何処でもいいから、人のいないところに行つてえ！！！」

なんとも無茶苦茶である。

なんだろうな、この展開・・・と思わなくもないけど、それも今更だ。

私の指示に遠吠えで答えたルガは、強く地面を蹴って走りだした。

逃げるが勝ちってホントかな（後書き）

．．．．．なんだろうな、この展開。は私のセリフだ W W W W W W W

ちよ、どうしてこうなった W W W

この世界にも厄日の概念ってあるの?? (前書き)

連続であっぷ

文章の長さも頑張った方だと思う(。 。)!!
頑張ったよ!ほめて、ほめて!!!

あ、それとお礼を言わせてくださいぐ(*、*)ノ
皆様のお陰でPVが26、770アクセス、お気に入り登録が29
1件になりました!!

しかし、それにしても何でこんな小説が・・・(; ； ； ；)
ゴクリ

この世界にも厄日の概念ってあるの??

私を乗せて走ってくれたルガは私の要望通り、人のいないところを目指して駆けてくれた。

駆けてくれた……のは良いのだが。

「うん……。私的には人間的な生き物全般のいない場所って意味だったんだけどねえ。。。」

どこか天然要素のある我がアツシー君二号はそのド天然さを発揮して、とある国に連れて来てくれた。

見た事もないし聞き覚えもない国名からしてあの戦争からの500年の歳月の間に建国された国であろうことが伺える。

勿論、国だから国民がいる。

でも、それは人間ではない。

……じゃあ、何が住んでいるかという話になるのだが。

この国に住んでいるのは一般的に「獣人」と呼ばれる種族になる。

獣人にもいろいろと居るのだが、ここでは一括りで纏めて説明させて頂く。面倒だし。

この世界的認識では当然の如く人間ではない……が、姿形は人間に耳やら尻尾やら羽が生えたものでしかないのだ。

ぶっちゃけ、私に言わせれば人間とあまり変わらない、ということ。

国を治める王が獣人なら、国を護る騎士団も全て獣人。国民もぜー

んぶ獣人。

人間は入国不可！・・・という訳でもないのだが獣人は人間を恨んでいる傾向にあるらしく、ここに不用意に人間が入れば袋叩きにされてしまう・・・かもしれないんだとか。これ、レディ情報。確かにこれだったら人間はいないだろう。ルガは間違っただけ。うん、私の言葉を馬鹿正直にそのまま実行に移したただけだもんね。それでちよーっと私の考えの斜め上方向に行っちゃっただけで。

さて、この獣人という種族だが、

人間に比べて運動能力や見かけが優れている傾向があるせいで、昔（私が（起きて？）いた頃）は奴隷として扱われることが多かった。

なぜ、優れている獣人が奴隷と言う立場に甘んじていたかというのもとある精霊魔法のせいだったりする。

その精霊魔法というのが本来は幻獣や、神獣と契約をする際の補助に使うものだったのだが、どこでどうひん曲がってしまったのか、とある魔術師がその精霊魔法を元に「獣人を縛る」魔法を開発してしまったのだ。

あの頃の精霊は良くも悪くも純粹で、人の営みに関してはかなり無知だった。

しかも、下位精霊だ。何が良い事で何が悪い事か等知る由もなく。

魔術師に請われるままにその魔法を獣人に発動してしまい、気付けば獣人は全世界で奴隷として良い様に扱われるようになってしまっていた。

私が召喚された頃なんかは、それはもう酷い状態で獣人からすれば地獄でしか無かっただろう。

男の獣人は戦争や雑用にこき使われ、女の獣人は人間に比べれば見目が良いのが多いのが災いして性奴隷として酷い扱いを受けていた。

ああ、懐かしい。召喚されたばかりの頃、全てに抵抗しまくっていた私は暴走の中でその現状に吐き気を覚え精霊達を癪癪ついでに八つ当たりのように怒鳴り飛ばしたのだ。

「無知な事は罪と知れ。知らないからと言ってこんなことは許されないんだ」と。確かそんな事を言った気がする。

今思い出してみると、なんか芝居がかっている気がする、ハズカシイ。

・・・暗黒の記憶だな、よし、封印しよう。

まあ、とにかくにも。

言われるがままだった精霊達を怒鳴り飛ばして、ついでに獣人を慰めやらに使用している私を召喚した国の阿呆共もぶっ飛ばして、私は奴隷たち全てを解放した。

二度とその精霊魔法が使われない様に、精霊達にキツク言い渡し、ついでに「呪文を唱えたら唱えた人間の一族ごと滅ぼす」と全人類に向けた脅しもかけた。

いやあ、あの頃は若かったな、私。生かしてやるなんて優しすぎでしょ。

・・・閑話休題。話思いつきり逸れたなあ・・・。

ルガが連れて来てくれたのは、そんな獣人達の国。

確かに、自分たちを良い様に利用していた人間なんかの国に居たくなんかないよねー。

うんうんと頷いてしまうのはとても他人ごととは思えないからだ。

ちなみに、そんな獣人の国と人間の国は険悪で戦争中・・・と言っ訳ではないそうだ。

またまたレディ曰く、獣人達の国のトップは「人間と争うのも馬鹿馬鹿しい」という考えらしい。

大人だなーと感心せずにはられない。

くううん……

頂垂れて背中を大きく丸めているルガを撫でながら私はつらつらとそんなことを考えていた。

私の「お願い」を上手く叶える事が出来なかったのが悲しいらしいルガはずっとこんな調子で話しかけても「くううん」としか言わないのだ。

「ルガ、そんなに落ち込まないで。」

ぼんぼんと背中を叩いて慰めてみるが相変わらず浮上する気配は無い。

私の言葉が足りなかったのが悪いのであって、ルガは全く悪くないのだけとねえ。

「あの痴態を見ていた人たちから遠ざかれれば何処でも良かったのよ。だからルガ、そんなに気にしない気にしない！」

くううん……

駄目だ、これは。重症だ。

どれだけ慰めて見たところで、ルガは結構頑固なのでしばらくは浮上しないだろう。

早々に諦めた私はルガを見守ることにして（還すのもアリだが、一人は何となく嫌なので）、獣人の国に入国する事に決めた。

獣人達は人間に比べれば全然まともだ。

喧嘩っ早い……という難点もあるがそれには個人差があるし、質の悪さから言えば人間の方が扱いづらいだろう。

「さつて、入国できるかなー？つと」

奴隷から解放された獣人達が作った村に私は獣人の救世主として出入り自由だったのだが、しつこいようだが500年だ、500年。自覚は無いが現実、私の常識は500年前のものだ。通じるのか？……通じないと思うんだが、どう？？

きゅん？？

私の自問自答にルガが何？と言わんばかりに不思議そうに首を傾げている。

気にしないでいいよー。と伝える為にわしわしと首元の柔らかい毛を撫でてやる。

悩むだけ無駄だ。

行ってみて追い返されるなら素直に下がればいいし、入れたら入れたでご飯食べて宿とって寝ればいいし。

困る事は特に無いし、入国できても出来なくても問題はない。となれば特攻あるのみ！よね。

……結論から言おう。

入国は出来た。でも、問題は大有りだった。

というか、問題しか無かった。なんぞ、この状況は。。

こんな事になるなら追い出された方がまだマシだったと思う。贅沢せずに野宿すればよかったと激しく後悔。

私は「はふう・・・」と溜息をつくしかない。

目が覚めてから一日しか経っていないというのになんだというのか。厄日か？そうか厄日なんだな？？？

精神の安定の為に落ち着いた風に傍らに佇むルガを力の限り抱きしめる。

全力で抱きしめているというのに、ルガは苦しそうな素振りを欠片も見せない。むしろ嬉しそうに尻尾をブンブン振っている。

癒されるよ、るーちゃん。とゆうか、アッシー君達だけなのかね、私の味方は・・・。

今のこの状況、私には理解不能だ。

だって、12〜3人程が私とルガを囲む様にして跪いてるんだよ？？

そう、跪いているのだ！

・・・大事な事だから二回言いました。

どうしてこうなった。いや、むしろこうなるべくしてこうなっているのか？？

「ようこそお越しくださいました、我らが救世主^{メシア}」

そう、跪いている獣人の一人が言う。丸い耳にふわふわの金髪と尻尾。多分、獅子の一族かな？

・・・てか、何所かで聞いた事のあるセリフだなーと思ったらあれだ、召喚直後にあのいけすかないベリオ王国の王に言われたセリ

フにそっくりだ。

おっけー、わかった。これは嫌がらせなんだな？

獣人の国を滅ぼしてしまえ　という神のお告げなんだな？？

『そんな事言つてなっ・・・』

レディの声が頭に響いた気がするが華麗にスルーだ。

勝手に頭の中で喋ってんじゃないよ、カスが。

どいつもこいつもホント、良い根性してる。許すまじかな。

それにしても召喚されてから今まで良い事一回でもあつた覚えが無いのだが。

いや、多分あつただろうが嫌な事がそれら全てを掻き消してしまっている。

なんか、自分が不憫すぎて泣きそうだ。

怒りにふるふると身体を震わせる私に気付いたらしい獣人達が慌てたように何が悪かったのかを尋ねてくる。

何が悪かったかって？？全部だよ、ぜんぶ！

入国手続きの直後攫うようにして城にまで連れて来て置いて「何が悪かったか」等と聞いてくる奴らの神経が知れない。

抵抗しようにも、頭の中でレディが『待つて！ちよ、待つて！！話聞いてあげて！！』等と喧しく頭の中で話すもんだから滅ぼ・・・失敬、抵抗する暇も無かった。

あ、なんでレディの声が聞こえるかっていうと、私の物騒な考えに勘付いた獣人を気に入っている彼女が私を止めようと躍起になって念話を飛ばしてきたからだ。

獣人の頭に生えた獣耳やら尻尾がツボなんだって。・・・正直知つたこっちゃないよ、そんな事。

・・・で、念話でのレディの話によると私を散々利用した人間が大嫌いな神々だが、獣人は別なのだそう。
基本なんにでも愛され体質な私に獣人は優しくったからね、多分そのせいだろうと思う。

人間は俗物的な思考がかなり強いが、神獣の血をひく（という伝説がある）獣人達は神獣程ではないにしろとても純粹で誠実だったから少なからず私も信用してたし。

でもそれも結局は500年前の常識だ。

500年後の獣人はその範疇では無いらしいな、と残念に思いつつ全力の抵抗をしようかと魔力を集め始めたところで『だめええええええええ！』というレディの叫びが頭ん中に轟く。

・・・この声が聞こえるのが私だけ、というのはあまりにも酷い仕打ちだと思う。おい、誰かこの苦しみを一緒に分かち合え。

「・・・五月蠅い、ホントに」

ポツリと口について本音が零れた。ちよつと黙っててくれるー？？とレディに対してちよつとばかり本気の殺意が湧いた。

私の呟きは極々小さいものだったのだが耳の良い獣人達には充分な音量だったらしく、ビクウツ！と跪いたまま彼らが身を竦ませる。

呟きはレディに向けてのものだったのだが、黙ってくれたなら丁度いい。

状況・・・説明して貰いましょうか？？？？

この世界にも厄日の概念ってあるの?? (後書き)

ちなみに、

姫ちゃんの愛され体質は人間にも有効ですが人間は欲にまみれている為、強大な力を持つ姫ちゃんを我が物しつとも良い様に利用しようとする躍起になるんですねー

なので姫ちゃんにも姫ちゃんを愛するあらゆる者達にも基本嫌われております。。

勿論、そんな人間ばかりな訳ではないのですが姫ちゃんに近づくものはみんなこんななんばかりだった為、今では人間と言う種族丸ごと神様やら精霊やらに嫌われてます。

連帯責任ってやつだね。。

誤字脱字、文章の矛盾点などに気付かれた場合はご連絡お願いいたします。

あーんど

感想頂けたら励みになりますので是非お願いr y 自重w

あ、あと。。

お気に入り登録が300件突破したらお礼になんか閑話をいれようかなーと思うのですが、どうでしょうか??

是非ご意見を頂ければと思うのですが・・・どうでしょうか??
詳しい事は活動報告にて書かせて頂きますので、よろしかったらそ

っ
ち
も
見
て
行
っ
て
く
だ
さ
い

）
）
ペ
ー
じ
ん
ち
ょ

うなじは乙女の絶対領域の一つだと思っの（前書き）

サブタイトルに深い意味はありませんw w

そもでもって、更新遅れてスイマセンorz

仕事が忙しくてなかなか更新できなくて・・・。（、、）
。。。。

しかし。。

書いている間に何を書いているのか分からなくなるといふ不思議
、（、

明日ぐらいに読み返して書きなおします、ハイ。。。。

うなじは乙女の絶対領域の一つだと思っの

むかしむかし、じゅうじんたちはにんげんにどれいとしてひどいあつかいをうけていました。

おとこは、せんそうにかりだされ

おんなはぼつりよくをふるわれていたのです。

すべてのじゅうじんはいきることにつかれ

ただ、いいなりになるひびをすごしていました。

そんなぜつぼうがじゅうじんたちをつつみこんでいたころ

あるひ、せいじよさまがあらわれました。

そのせいじよさまはうつくしいぎんいろのかみに

すんだあおいろのめをもつ

せいれいさまとかみさまにあいされたそんざいでした。

ぎんろうのおうと、ふるきりゅうをしたがえたつよくやさしいせいじよさまは

じゅうじんへのひどいあつかいをしるとなげきかなしみました。

そしていいました

「なにも知らないということとはなんとつみぶかきことか。

じゅうじんはしんじゅうのちをひく、けだかきものたち。

にんげんがいろいろにあつかっていいものたちではない」

と。

そしてにんげんからじゅうじんをかいほうし、じゅうをあたえてくれたのです。

だからじゅうじんはせいじょさまをかんしゃをこめてこうよびます。

「救世主^{メシア}」さま……と。

獅子族の男から渡されたこの世界での所謂「ひらがな」ばかりの子供向け絵本をぱたと閉じて私はヒクヒクと頬を引きつらせた。

・・・一体誰の話だ、これは。

銀色の髪に蒼色の瞳。私と似通った点はあるにはあるが、あえて言おう。それも、声高だかに言わせてもらおう！！

・・・コレ、絶対私じゃない！と。

確かに、獣人を人間から解放した覚えはある。あるにはある・・・けどこんな御大層な絵本にされるような崇高な気持ちからでは無かった。

正直言つて八つ当たりで起きたに過ぎない事だし、意図的に助けた訳ではない。

獣人解放はハッキリ言つて、オマケだ。私の八つ当たり勝手に付随してきたオマケ。

・・・しかも、なに？あの「女神様」の発言。

あんな事言つた覚えはないし！しかもなんか厨二病チックだし。

いやいやいやいや、誰だよこの絵本作つたの！偽造しすぎだろう！盛りすぎだろう！！！

ぜんっぜん子供向けの絵本には向かないぞコレ！

しばらく女神様が獣人達を解放するページを魂の抜け出た状態で眺めていた私は、無意識に絵本の表紙の「めしあさまのものがたり」というなんとも分かりやすい題名の下作者名を確認した。と、同時にガツクリと肩を落とす。

そこには「ロード・レドリア」の文字。

・・・覚えのありすぎる名前に本当に魂が昇天する思い

だった。

なにしろ私の知り合いの中にロード・レドリアという男が存在するのだ。

猫の一族の黒い耳と尻尾を持っているしたたかな性格をしている男で、いつも私に「好きだ」と言っただけで憚らなかつた物好きの一人で、しかも、こういうことしそうなヤツ。

だから、もし私の知っているロード・レドリアとこの絵本の作者が同一人物なのであるとするならこの絵本の内容も頷ける。

・・・十中八九本人だろうけど。

彼は私が嫌がる事をするのが大好きで、よく何かしらの嫌がらせ（彼曰くいたずら）を仕掛けてきていたのだ。

私が本当に嫌がるような事はしないし、根本的には良い奴だったのでも本当の意味で彼を嫌いになることはなかつたのだが・・・。。まさか500年経つてもなお私に対して嫌がらせをしてくるとは。。。

しかも、今までの嫌がらせの中でも一、二を争えるほどにインパクトがあるものをww

出会ったあの時に躊躇わずに殺しておくべきだったか？

あまりの仕打ちに身体が一層大きく震えるのが分かつた。

今はいない（獣人の寿命は長いものでも大体が60年程だから）彼が目の前にいてくれたらよかったのに心底思つた。

目の前にいてくれたなら・・・。。全力で痛め付けてやつたというのに。

というか、どいつもこいつもやり逃げにも程があると思う。

・・・いや、ほんとに勝手に500年もの長い時を眠ってたのは私であつて、彼らはその間に決して抗うことの出来ない「死」というものによってこの世から去らざるをえなかつた・・・。。というの

は分かっているのだ。

ああ、私は何を言ってるんだろうな。頭の中がミキサーで掻き混ぜられたかの如くグチャグチャなのだ。

「その獅子の一族のアンタ。」

「は……ハッ！」

「悪いけどこの絵本の女神様は私じゃないわ。期待させて悪かったわね。」

……ということでしたらばくれる事に使ってみました。

口八丁手八丁。女優な私には余裕余裕。大丈夫、頑張れ私の表情筋。彼らが勘違い（いや、助けた事はホントのことだけど）している理由は髪と瞳の色、あとはルガが原因であろう。

ウン、ダイジョウブ。なんとか逃げ切れる……と期待したい。

「ですが、貴女様は伝承にある通りのお姿です！！」

「髪と目の色の事？確かに珍しいかもしれないけど、無い色じゃないわ。」

そんなことで断定されても。と苦し紛れに言おうとして、「それだけではありません！」と遮られる。

ああ……嫌な予感。

「伝承によると、その女神様の項には神を表す紋章（つなじ）があると言われています。貴女様の首にもありますよね……？」

……アリマスヨー。

ここまで連行される間になんか首触られてるなーとは思ってたけど、まさかそれを確認するためだったとは。

私の髪は長くて背中まであるから基本的に紋章は人の目に入る事は無いし、私自身、自分で紋章を見る事はほぼ無いからすっかりその存在を忘れていた。

私の項にあるのは、創造神であるクロノスの愛娘であるものを示すもので、簡単に言ってしまうえば翼の生えた十字架である。

まあ、すごい綺麗な刺青×100倍くらいのものを想像して貰えば手っ取り早いと思う。

愛娘と言っても、ホントの娘なわけじゃないんだけど。

それほど大事にしていますよーっていう目印っただけ。

つまりは、私に手を出せばクロノスに手を出したも同義・・・ということなワケ。

ちなみに言うと、私からすればクロノスは過保護系ほのぼのパパな性格の持ち主だったりする。

地の精霊神であるグランも似たような性格の持ち主だからこの二人はとても仲が良い・・・ってアレ？何の話してたんだっけ？

くうん・・・

ツンツンと突かれて、ハツと目が覚める。

マジで現実逃避してたっばい。戻って来い、ワタシ。

心配そうに見てくるルガを撫でくり回した私は、もう何だかいろいろと考える事が面倒臭くなってきていた。

もーね、投げやりになっても良いと思うんだ。訳分かんないし。

・・・と、いうことで

「パパー……! ! ! ! !」

この世界で一番の創造神、クロノス召喚。

うなじは乙女の絶対領域の一つだと思っの（後書き）

訳分かんなくなったのは姫ちゃんじゃなく、あたし
（、　、グスンッ

何を書いているのか分かんなくなってきましたw
ちよっと待って、整理しようかワタシ！なノリです、、、、

そしてクロノス召喚。。
パパーという言葉で召喚されちゃうんです、ハイ

感想、やら指摘などどんどんお願いします。
あんまり辛辣だと心が折れます。ぽつきりいきます（、；；、）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3480t/>

ウソとホント(仮)

2011年5月30日22時57分発行